

【彙報】（平成二十年四月～平成二十一年三月）

◎平成二十年度埼玉大学国語教育学会大会 総会

○平成二十年十一月十五日（土） 於埼玉大学

◇研究発表

①折口信夫研究「道行き」を中心に

高橋 尚（埼玉大学大学院2年生）

②大伴家持 七夕歌研究

横山 卓司（埼玉大学大学院2年生）

③外国人生徒と学び合える授業の提案

佐瀬 正伸（埼玉大学大学院2年生）

④高等遊民としての謙作——『暗夜行路』論

金成有希子（埼玉大学大学院2年生）

⑤『播磨国風土記』讃容郡柏原思考

宇賀神 裕（立正中等学校非常勤講師）

◇講演会

新宗教に見る現代日本社会

薄井 篤子（神田外語大学）

◇総会

◎平成二十年度假例会

○平成二十一年二月十四日（土） 於埼玉大学

◇修士論文発表

①直子の意味——『暗夜行路』論

金成有希子（埼玉大学大学院2年生）

②外国人児童と学び合える授業

佐瀬 正伸（埼玉大学大学院2年生）

③大伴家持作品研究——J・S・S 番歌を中心に

横山 卓司（埼玉大学大学院2年生）

④みせかたで考える祭りの姿

高橋 尚（埼玉大学大学院2年生）

◇卒業研究発表

①児童の文章理解における挿絵の効果

若松 陽子（埼玉大学4年生）

②おちくぼ考

門井 萌莉（埼玉大学4年生）

◇講演会

政治小説と現代社会

山本 良（埼玉大学教育学部教授）

◎平成二十年度修士論文・卒業論文題目

○修士論文題目

平成二十年度修士（平成二十一年三月修了）

直子の意味——『暗夜行路』論

金成有希子

外国人児童と学び合える授業

佐瀬 正伸

大伴家持作品研究——J・S・S 番歌を中心に

横山 卓司

みせかたで考える祭りの姿

高橋 尚

○卒業論文題目
平成二十年卒業生（平成二十一年三月卒業）

『今昔物語集』における「兵」考

渡辺 正浩

風姿花伝を巡る教育的言説の再検討

長谷川晃司

「孟子」における古代中国概念の研究

石川 貴士

『和泉式部日記』の主題

赤木 李衣

教員養成における授業のあり方について

新井 啓子

虚構世界における体験のもつ意味

出月 新治

- 『韓非子』その思想の研究 伊藤 雅生
- 教室における「ありがと〜」 「ごめんなさい」がもつ意味 井上 雅也
- 安部公房考『壁』にみるシュールレアリスム 内部 充広
- 落書考 浦野 一栄
- 『孟子』における人間観 大崎 雄太
- 『クレヨン王国』シリーズの魅力 大谷 有香
- 伊坂幸太郎論―三部作の主題について― 岡部 祥子
- 墨子兼愛篇について 勝又 由加
- おちくぼ考 門井 萌莉
- 白居易の詩における女性観
―女性の美しさの表現― 門脇 麻未
- 史記の研究―武帝期における対匈奴政策― 金子亜由未
- ロアルド・ダール考 加納由紀子
- 古事記構想論 神谷 悠
- 三浦綾子の人生観 〓人はどのように生きるべきか〓 川村 昌代
- 古代中国文学における「桃」の役割について 小坂井達也
- 谷崎潤一郎『細雪』研究 小嶋麻由子
- ケイタイ小説を通しての若者文化と教育 斉藤 大悟
- 『管子』の政治思想について
―経言類を中心にみる― 桜野 涼子
- 大伴旅人論 佐々木優介
- 宮崎駿の「となりのトトロ」における
郷愁についての考察 佐藤 祥悟
- 魏晋南北朝の養生思想 佐藤 達也
- 『ガリヴァー旅行記』研究 佐野 仁美
- インクルーシブ教育推進における重要性和
実現に向けての取り組みについて 菅沼 亜美
- 助詞「も」の現代における意味・用法について 鈴木 亜依
- 絵本『あらしのよるに』研究 高瀬 幸枝
- Sound Horizon 研究 高野 亜実
- 森絵都の作品から伝えられるもの 田中 美里
- 環境が子どもの学習意欲に及ぼす影響について 田畑 晴康
- 学力調査から考える読解力育成の教育 千葉はる菜
- マンガを優れた情報伝達ツールとして捉え直し、
教育ツールとして活かす 津路 健介
- 日本昔話研究―鼠の特徴とその話型― 坪井 映子
- 遠藤周作とキリスト教
―たどりついた「愛」のかたち― 中野 美幸
- 風土記考 野口勇一郎
- 現代のカタカナ語の意味・使われ方 花見 七瀬
- 武者小路実篤論 林 由希菜
- 児童文学研究「あさのあつこ」考 平野 咲子
- 国語教科書における言語事項の背景と考察 廣戸 理伸

国語科における「死」の教育の可能性

藤枝 知華

これからの日記指導

—自分と向き合い、他者へと発信する日記

渡辺 勇気

生き方教育についての一考察

—つながり回復と創造に向けた

ワークシヨップをもとに—

前田 明香

大宰治「お伽草紙」論

大宰治はなぜ「桃太郎」を書かなかったのか

国府田 創

女媧論

—文献・図像からみる女媧像と、その変遷—

増田 美希

◎埼玉大学国語教育学会研究奨励賞受賞論文の

紹介と講評

谷崎潤一郎論—初期作品における女性論

宮路 智美

平成十一年度より、研究・教育の活性化のため、学生会員の作成した卒業論文の中から特に優秀と認められたものを表彰しています。第十回に当たる平成二十年度は、八本の論文に研究奨励賞（賞状と副賞）が贈られました。

村木 太俊

怪人二十面相シリーズからみる江戸川乱歩研究

矢野 礼子

以下は、受賞した論文の紹介と講評です。

客と店員とのコミュニケーション

矢野 礼子

「教室における「ありがと」といふ」

矢吹 友紀

「「めんなさい」が持つ意味」

古事記の構想—大國主神話を中心に

山口 卓士

井上 雅也

わらべうた「かじめかじめ」

—なぜ怖いわらべうたと言われるのか—

横山 祐香

「めんなさい」という言葉が素直に言えること、という視点から、その重要性とそれを実現するための必要条件について、具体的な事例を使って考察したものである。教育活動において重要な問題に主体的かつ独自の観点からアプローチし、その結果有意な解決方法を提示し

児童の文章理解における挿絵の効果

若松 陽子

得ていることが高く評価された。

「墨子 兼愛篇について」

勝又 由加

本論文は、戦国諸子のひとつである「墨子」の「兼愛篇」について、その構成・内容の両面から検討したものである。「兼愛篇」は、他者を身内と同じように「兼ねて愛する」ことを主張した、墨子を代表する文章だが、上・中・下の三篇から成る。本論文では、三篇それぞれについて、先ずその構成、論の展開を分析する。そして、上篇は「主題の提示」「考察」「仮説」「まとめ」「結論」、中篇は「主題の提示」「反証」「実例の提示」「論証」「まとめ」、下篇は「主張」「説得」「まとめ」という構成になっていることを示す。更に、上から中、下篇へ至るにつれて、論理の精密さが増していることを明らかにしている。また内容を深く分析し、兼愛説を支える考え方として、上篇では「拒利」が説かれていたのが、中・下篇に至って「交利」に変化していたこと、兼愛を推進するよりどころとして、上篇では「各人の意識」、中篇では「治者の率先」、下篇では「治者の賞罰」と違いが見られることを明らかにしている。複雑な漢文の文献を、その論理構造に着目して読み解き、しかも内容分析において新しい知見を産んでいる点、高く評価される論文である。

（文責 薄井俊二）

「おちくぼ考」

門井 萌莉

本論文は、他の継子譚には見られない要因（後半部における、継母への報復と厚遇）に注目して『おちくぼ物語』の主題と構造には二重性が存す

（文責 戸田 功）

ることを論じる。前半部は女主人公を主題とする継子譚であるが、後半は男主人公による、継母への報復と厚遇が主題になっていると指摘する。作品を丹念に読み込み、かつ綿密な調査に基づく力作といえる。

物語がもつ「二重」性や複層性の意義について、他の平安物語との比較検討が今後なされることを期待したい。

(文責 飯泉健司)

「三浦綾子の人生観

く人ほどのように生きるべきか」

川村 昌代

本論文は、三浦綾子の代表作と見なされている『塩狩峠』『泥流地帯』を取り上げ、作家の全貌を明らかにしようと試みたものである。三浦綾子の生涯と作品とを精緻に分析する論文として高く評価された。とりわけキリスト者としての作家の生き方や思想と、その作品との緊密な関係を読み取っている点で、必ずしも研究が盛んとはいえない三浦綾子研究に寄与するものである。作者に関する人間学的な関心と作品の丁寧な読み取りに支えられた好論文である。

(文責 山本 良)

「日本昔話研究―鼠の特徴とその話型―」

坪井 暎子

本稿は日本各地の昔話に登場する動物が色々な性格や特徴を持っていることを実証的に論証しようとした論文である。本稿では特に鼠を対象として取り上げ、『全国昔話資料集成』に掲載された

昔話から鼠が関連する計の話を抽出し、分析を加えた。その結果、話型としては「鼠浄土」「鼠経」に分類される昔話が様々なバリエーションを持ちつつ全国的に広がっていることなどを明らかにした。精力的な調査と精緻な分析が高く評価される論考である。

(文責 村上 謙)

「児童の文章理解における挿絵の効果」

若松 陽子

本稿は児童における文章の理解度を挿絵の有無という観点から分析した論文である。調査では、小学校二年生児童を対象として、国語教科書に所載された挿絵入り物語文教種について、挿絵がある場合とない場合とでそれぞれの文章の理解度を測定した。その結果、挿絵は場面展開や文章全体の理解、心情把握において効果的であることが判明したが、一方で挿絵があることで文章とは内容の異なるイメージを構築してしまう場合もあり、挿絵が内容理解を阻害する一面があることも判明した。周到な調査と精緻な分析が高く評価される論考である。

(文責 村上 謙)

「これからの日記指導

―自分と向き合い、他者へと発信する日記―

渡辺 勇気

本論文は、日記指導という児童生徒の生活全体をおおむね教育課題を、中学校の国語科指導という限定された領域の中で、可能な限り、「理想」に近づく形で実践しようとする提案である。

その着眼が良いのと、実践に向けての具体的なアイデアの出ているのが良かった。

日記を作文を書く上での「取材ノート」として活用すること、又、他者との交流における日記の活用など、生徒が自分や周りの出来事を観察するにとどまらず、他者とのコミュニケーションをとることに「日記」の意義を認めている。もちろん、公開における危険性や、場当たり的でない指導の計画性など、課題も多いが、筆者は思春期という自我形成のむずかしい年齢の時にこそ、「日記」指導が必要だと説く。中学校教師をめざす筆者の熱意が文間にあらわれていた。

(文責 竹長吉正)

編集後記

『埼玉大学国語教育論叢』第十三号をお届けします。

本号には、埼玉大学名誉教授の木越隆先生の御講演をはじめ、論文三点、研究ノートを二点掲載することができました。会員諸氏には、これからも論文に限らず、活発なご投稿をお願いいたします。

(T)